

日本語・日本語教育部会

【概要】

太田 かのん*・エルデネー・ビンデリア**

日本語・日本語教育部会は、11月4日（土）10時5分から13時10分までオンラインにて行われた。本部会では、教員4名、学生5名による研究発表が行われた。以下それぞれの発表内容の概要を報告する。

1. 土屋はる野（お茶の水女子大学 学生） 「『朝ドラ』における夫婦間の呼称—関係性の変化に着目して—」

土屋氏は、夫婦の関係性の変化によってどのように互いの呼称が変化してゆくのかを考察するため、NHKの「朝ドラ」10本を調査した。

調査の結果、夫の方が敬意レベルの高い呼称が用いられる傾向にあると指摘し、これは現実世界の様相を反映しているためであると指摘した。また、夫は「結婚」、妻は「子ども誕生」以降に敬意レベルが低い呼称の使用へと遷移することも報告されたが、これは朝ドラ夫婦の使用する呼称の特徴であるとした。

さらに、「父称/母称」使用が見られなかったことは話者が「物語の主人公」であるという特徴の反映であり、また「応答詞」での呼びかけがなかったことと、「ゼロ呼称」が一例のみだったことは、話者が誰に話しかけているのかを伝わりやすくさせるためであるという。そのため、これらは特にフィクションの夫婦を対象とした本研究に特有の結果であると結論づけられた。（太田）

*お茶の水女子大学・院生
**同・院生

2. 李禹錫（台湾大学 学生） 「日本語におけるミラティブ性の表現について—ミラティブのタ形の意味用法を中心に—」

李氏は、動作動詞のタ形でミラティブ性を表すメカニズムの解明が十分でないとしたうえで、「ミラティブのタ形」を状態動詞の場合と動作動詞の場合に分け、テンス・アスペクト的な観点から再検討を行った。

結果、「あった!」のような状態動詞の場合は過去完成のタ形に由来するとされ、[探索意識による観察行為—過去状態の存在—状態の発見]の順次的な叙述が特徴であると指摘された。

一方で、「来た!」のような動作動詞の場合は現在パーフェクトのタ形に由来するとした。その「発見」の流れは、[ある出来事の開始か終了—探索意識による観察行為—先行した出来事の効力の発見]であり、状態動詞とは時間性のメカニズムや「発見」の流れに相違があると報告した。（太田）

3. 趙萱（北京外国語大学・北京日本学研究中心 学生） 「対義形容詞『明るい』と『暗い』の意味的非対称性に関する—考察—アフォーダンスの視点から—」

趙氏は、「明るい」と「暗い」の連体用法の共起名詞についてNINJAL-LWP for BCCWJを用い調査した。

結果、「明るい」は色を表す名詞と共起しやすく、「暗い」は特に「通り道」といった自然関係の名詞と共起しやすいという傾向を報告した。

趙氏はこの非対称性をアフォーダンス理論から検討し、「暗い通り道」という表現は人間に「恐怖」や「不安」という有標な価値を与えるが、「明るい通り道」では単に「通れる」という価値のみを与えているにすぎないのだと考察した。これに関して、趙氏は「暗い」「通り道」という共起関係では、話者が「明るい」環境から「暗い」環境に移行したときの「暗くて不快」という心理状態、そのような環境の知覚を得た自分を知覚するということになるのだと述べた。(太田)

4. 黄鈺涵 (台湾大学 教員)

「紙芝居を音読教材として用いる試み—JFL日本語学習者を対象に一—」

黄氏は、日本語教育における音読指導の不足を指摘し、その改善案について検討した。JFL日本語学習者を対象に「CEFRやJF Standardの言語能力目標」を参考にして、「音読能力のレベル分け及びA1～A2レベルの音読能力記述文」作成の試みについて報告を行った。さらに、言語と文化という2つの要素を取り入れた紙芝居教材についても考察がなされた。黄氏は、外国語教育と音声研究における紙芝居の応用について検討し、「日本語単一話者オーディオブック・紙芝居朗読音声コーパス (J-KAC)」を取り上げた。その調査結果によると、このコーパスは「教育目的を考慮したものではないため、内容の難易度やトピックの多様性という点で、日本語学習者に適用できない可能性がある」という。そこで「jReadability 日本語文章難易度判別システム」を用いて、「各レベルに適用する音読教材を選出」し、実際の日本語授業へ活用する方法について提案された。(ビンデリア)

5. 朱桂栄 (北京外国語大学・北京日本学研究中心 センター 教員)、彭子燕・楊録溪 (北京外国語大学・北京日本学研究中心 センター 学生)

「中国の大学日本語教科書における登場人物の設計に関する研究」

朱氏は、中国の大学の「日本語専攻の基礎日本語」科目で使用されている『総合日本語』という教科書を分析対象とした。対象教科書を「内部的な体系性」と「外部的な有効性」の観点から分析した。

その結果、まず「人物設定の内部的な体系性」について次の2点「(1)登場人物の性格の関係性と人物の成長、(2)登場人物の関係性の視点からの分析」が報告された。次に、人物設定の「外部的な有効性」について「(1)登場人物の真実味、(2)登場人物の文化性、(3)登場人物の異文化性」の3つの側面が明らかになったことが報告された。

朱氏は、以上の結果を次のようにまとめた。「内部的な体系性」の視点から、総合日本語教科書は「人物設定の一貫性がある、人物の性格と物語の展開と関連性を持っている、登場人物の成長と変化が見られドラマ性がある、異文化交流が展開されている」という点で学習者の言語学習と文化理解において有意味である。また「外部的な有効性」の観点から、「一定の実事性がある、文化的な背景が反映されている、異文化間の衝突が描かれている」という点で、教科書における人物設定の外部的な有効性がある程度保証されていると結論づけた。(ビンデリア)

6. 加藤直子・Nguyen Van Anh (お茶の水女子大学 教員)

「日本文化の中で高学歴移住女性のキャリア観はどのように変化するか—複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いて分析したベトナム人女性のインタビューを通して—」

加藤氏とNguyen氏は、日本在住のベトナム人女性のインタビューを通して次の2つの課題「①日本に結婚移住した高学歴ベトナム人女性のキャ

リア観はどのように変化するか、②キャリア観を変化させる文化的促進（SG）・阻害（SD）要因はどのようなものか」という点について検討した。研究方法としては「複線径路等至性アプローチ（TEA）」を用いて分析された。報告によると、「インタビュー内容を基にTEM図を作成し調査協力者と確認しながら修正を加え径路を可視化」したという。

分析の結果、課題①に関しては、調査対象者には「日本で大学教員を目指すが諦める、育児期にやむを得ず主婦化を受け入れるがパート勤務や友人の起業の影響を受け経済的に自律を希望、育児が一段落した後の第二の人生での起業という新たな目標を見つける」という変化が見られたという。課題②に関しては、「TEM図においてキャリア観を変化させる文化的促進・阻害要因が複数確認できた」という。以上の結果から『主婦』『第二の人生』が高学歴ベトナム人女性のキャリア観に大きな影響を与えている」と結論づけられた。最後に、「日本の女性労働環境・家事・育児について、バーチャル（on-line）で学ぶ機会を提供する必要性について」提言が行われた。（ビンデリア）